

# 博士学位論文審査要旨

2021年1月29日

論文題目：占領地の焦慮—ある上海青年の生活（1942～1945）—

学位申請者：劉 韻琤

審査委員：

主査：	グローバル・スタディーズ研究科 教授	錢 鷗
副査：	グローバル・スタディーズ研究科 教授	村田 雄二郎
副査：	グローバル・スタディーズ研究科 教授	富山 一郎

## 要旨：

劉韻琤氏の博士審査論文は、1942年から1945年まで、日本の占領下にあった上海で暮らしていた顏濱という一人の青年の日記をとりあげ、そこに書かれた日常生活と心理、およびそれらを包み込む心情を「焦慮」という語に集約してみることで、国家や民族という言説には回収されない一青年の生きる姿を考察し、マクロな歴史とミクロな個人史を結びつけるかたちで既存の関連研究を見直そうとしたものである。そのために著者が設定した課題は具体的に以下の三点である。第一に、日記と日記の書き手である顏濱に対する「丸ごと」の理解を試みたことである。つまり、顏濱の目を通して見えてきた戦時上海、そして複雑で変化する一人の都市青年の占領感覚を描き出すことによって、一元的な思想・政治・主義などに還元されない民衆と占領の錯綜した関係への視界が切り拓かれた。先行研究で顏濱を「都市の青年」と呼ぶのは、階層分類のいすれにも位置づけられない占領民の実態を意識したもので、対日協力者という従来の占領地民衆に対する過酷な評価を見直す意義はあった。この点に関して、本研究が「抵抗」と「協力」のはざまにある領域に着目したグレーゾーン研究に負うところも少なくない。だが、劉氏は「エリート、中間層、民衆」といった従来の区分において見落とされる「微塵」のごとき人物をとりあげ、個人の実存と抽象化された集団との本来的なズレに着目し、占領と個々の人間にとての「占領感覚」、解放と「解放感覚」の異なる次元に留意している。第二に、顏濱という一人の青年の日々の暮らしと心情のありさまに着目していることである。「ただの生活断片」に真正面から焦点をあわせることを通して、これまでの歴史叙述では見落とされてきた陰影に富む、一市民の「精神生活」を浮上させたのである。夜間学校という場で行われる些細な日常の反復は、被占領感覚に対抗できる、占領されていない内面的秩序を作り出した。「平穏」という日常感覚も占領の暴力があるからこそ作り出されたもので、戦時を生きるための「守り」の姿勢だと著者は指摘する。第三に、これまでの日記研究では、日記という「史料」を使用することを目的に、日記に書かれた個人の出来事や経験をすべて「戦時下」という枠組みに回収する傾向があった。これに対して、劉氏は顏濱の日常生活における矛盾、焦慮、疎外に光を当て、「戦時下」ではあるものの、抗日・救亡という方向ではなく、個人にとって切実なさまざまなかつらを語ることを、一青年の自己形成と自己創出のプロセスとして捉え直している。とりわけ、現実と未来に対する向き合い方を「逃げる」「守る」「待つ」という動詞形の三つのパターンで抽出したことは、もう一つの歴史の時空ともいいうべき占領下市民のリアリティを提示するものである。

本論文は序章と終章を入れて全部で六章から構成されている。審査委員会では、日記と個人史の違いや日記の読み方について、より注意深く吟味すべき方法論的課題があるとの指摘がなされ

た。また、「知識青年」という定義の不明確さや個人史としての考察の広がりが不十分であるとの疑義が出された。とはいえ、本論文は顔濱日記というテキストのみならず、同時代人のさまざまな記述、それに新聞、雑誌、文学、地方志など多くの第一次史料と照らし合わせながら、一青年の日常生活のリズムと心情のありさまを立体的かつ「生」のままに描き出そうとした点できわめて独創的である。心情のありさまを考察する分析方法は十分に熟しているわけではないが、占領下市民的心情を前景化した点において、本論文はこれまでの研究と一線を画し、既存の「グレーゾーン」概念自体を鍛えるようなレベルでの議論が可能になった。よって、本論文は、博士（現代アジア研究）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

## 総合試験結果の要旨

2021年1月29日

論文題目：占領地の焦慮—ある上海青年の生活（1942～1945）—

学位申請者：劉 韻琤

審査委員：

主査：	グローバル・スタディーズ研究科 教授	錢 鷗
副査：	グローバル・スタディーズ研究科 教授	村田 雄二郎
副査：	グローバル・スタディーズ研究科 教授	富山 一郎

要旨：

学位申請者である劉韻琤氏に対する総合試験を、2021年1月25日（月）16:45から18:15まで、同志社大学志高館SK111で実施した。申請者によるプレゼンテーションは約40分、審査委員と申請者による質疑応答は約50分であった。学位申請者は、本論文の問題意識、分析方法、関係する既存研究の特徴、具体的な考察内容、研究の主な達成点を丁寧に説明し、審査委員からの質問に対して概ね的確に答えた。また、本研究の学術的意義と今後の課題についての説明も説得力があった。

本論文の主要な部分は、査読付の学術雑誌で複数発表されており、関連学会においても報告され、良い評価を得ている。さらに、本研究に必要な日本語・中国語の能力も十分であることが確認された。また、日中近現代史、近代日記研究、記憶研究、上海史研究、戦時メディア研究、グレーゾーン研究などに関する知識も優れていることが確認できた。よって、審査委員一同は、総合試験の結果は合格であると認める。

# 博士学位論文要旨

論文題目：占領地の焦慮—ある上海青年の生活（1942～1945）—

氏名：劉韻琤

## 要旨：

本研究が注目したのは、一般人が経験した日本占領であり、そして本研究で扱ったのは、その占領期に生きた青年の一人である。近年、戦時期の上海をめぐる研究において注目すべき領域の一つは、戦時上海の中国人の抵抗と協力という既存の認識枠組みを批判し、両者のはざまにあるグレーな領域に着目した「グレーゾーン」研究である。しかし、従来の研究は政治家・知識人・地域エリートなどその動静が一定程度後づけることが可能な「有名人」に集中している。さらには、これまでの「グレーゾーン」概念は、「名のある人々」にとってのグレーゾーンを明らかにする概念だったのであり、沈黙し語らない存在とされた「名もなき人々」に向けられたそれではなかったともいえよう。戦時の上海に残った、あるいは残留せざるを得なかつた人々の生活や心理については、まだ明らかにされていない部分が多い。

「名もなき人々」の語り方を模索しつつ、一般人の生活史に着目してみたい。近年、顏濱というある庶民の日記が発見された。顏濱（1923年～？）は、戦時下の上海に住んでいた青年である。浙江省寧波市の出身で、1937年1月に上海に引っ越しした。上海の中学校卒業後は高校には進学せず、昼に金物屋「元泰」で働き、夜に第四中華職業補習学校に通っていた。顏濱はアジア・太平洋戦争勃発、日本軍の上海租界進駐直後の1942年（当時19歳）の元日に日記を書き始め、戦後の1960年代までそれを続けた。その日記が2015年に日記集『我的上海淪陷生活』として出版された。同書には1942年から1945年までの日記が収録（1943年分は紛失）されたが、その総字数は実に約40万字に上る。その中に、顏濱の勉学、交際、娯楽など個人の細部にわたる生活の記録が収録されており、ミクロな視点から日本占領期の上海の政治、経済、文化、さらに民俗や物価など、社会生活の一側面を語る価値の高い史料だと言えよう。そこで、本研究は、顏濱という上海市民の日記を手掛かりに、彼の生活実態を描きだした上で、占領地民衆の心理についてさらに分析することを目的とする。その上で、日常生活における占領とは何か、という問いに筆者なりの答えを出すことを目的とし、ついては顏濱の日記を通じて彼の日常生活と心理を知るだけでなく、それをいかに解釈すべきか、という問題をさらに考えたい。

顏濱の目を通して見えてきたミクロな戦時上海、そして複数の占領感覚を描き出すことによって、「占領下の日常生活」ではなく、「日常生活における占領」という新たな視点から描き出される民衆と占領の関係が、既存の歴史叙述を補うものとなるだろう。これは、単に占領と日常生活の力関係を反転させるだけのものではなく、「占領下」より本来は大きい枠であるはずの「日常生活」を用いることで、「占領下」の枠に還元されないものの発見、および既に還元されてしまったものの再考をする作業であり、史料の解釈に別の可能性を見出そうとする試みでもある。勿論、そういうものに収斂されないような矛盾というものはそのまま残しておく。

本研究は、全4章から構成される。

第1章では、顏濱日記に書かれた顏濱を考察する。日記はテキストでもあり、人間の「書く」という営みによって自省的に選別された事実でもある。このような日記の性格を意識しながら、そこに書かれた衣・食・住の記述に映し出される顏濱という都市青年の生活のあり様を描いた上で、彼に描かれた自己像とは何か、ということを考える。そこで顏濱日記を研究することは、彼のような知識青年がいかに「占領」という現実と向き合い、生きていたのかを明らかにすること

である。そのようななか顔濱は、時には現実から逃げる、時には現実を守る、時には未来を待つ、という三つのパターンを示した。次章以降、こうした三つのパターンそれぞれに焦点を当て、「微塵」のような、無数の、名もなき人々にとっての「生きる」ということの内実に迫っていく。

第2章では、顔濱日記で頻繁に登場した「内地に行こう」というスローガンを中心に、日本占領下の上海に「残留」した顔濱の内面的葛藤に注目する。内遷の背景を把握した上で、顔濱日記にこのスローガンが登場した各々の場面に着目し、彼の「内地夢」を分析する。「知識青年」であることを自認していた顔濱は、常に「残留」という不徳なアイデンティティとの決別を求めていた。彼は内地に行くことを望み、彼の「偉大なる理想」を実現させ、上海での「無意識」的な生活から逃れようとした。「内地に行こう」というスローガンは、単に抗日・救亡のそれであるだけでなく、焦慮から逃げる方向性を示すものでもあった。

第3章では、顔濱の夜間学校生活を中心に、学校というもう一つの生活空間を考察する。顔濱が毎夜通っていた第四中華職業補習学校の日常を考察することを通して、占領という不穏における、通学という行為によって作り出された「平穏」な生活リズムを考える。夜の学校生活は、被占領感覚に対抗できる、占領されていない内面的秩序を作り出した。このような内面的秩序は顔濱の個人の生産性の表れであった。この生産性は、一生懸命勉強し、広く交友し、雑誌を創刊するなど、第四補校という場で行われた日常の些細なことの反復の中で生じたのである。これらの反復=生活のリズムが顔濱に「平穏」を感じさせ、占領という現実から遠ざかったように思わせた。

第4章では、終戦直前における顔濱の空襲体験を描く。戦局が急転直下日本の敗戦へと向かう中、流言、空襲、避難といった解放の兆しとともに死の脅威が併存する真の意味での非日常が到来し、それまでの日常を転覆した。解放を意味する暴力である米軍の上海空襲の特殊性を考察した上で、顔濱にとっての「解放」を考える。解放は一面では希望を意味するが、他面において無秩序や混乱をもたらす可能性もある。その無秩序と混乱の中で、顔濱は絶えず次の「解放感」を得る方法を探していた。顔濱の「解放感」を日常生活のレベルに落とし込んで観察してみると、それは日本軍の支配の終結への期待と同時に、ある未決性を持つ未来の到来に対する期待として理解することもできるようと思われる。

そこから見えてきたのは、歴史上のグランド・ナラティブとは異なる個人の日常生活における「占領感覚」である。顔濱の占領感覚は従来の占領叙述とは必ずしも一致せず、様々な点でズレや差異、食い違いが見られる。そのためそれによって個人が感じる時間的感覚も、歴史に記憶された時間（記念日など）とは異なる来歴（コンテクスト）がそこに示されていると言えよう。公式的な日付とは異なり、日常生活レベルの「日付」に記憶された占領こそが、私が理解する「日常生活における占領」の中身である。

続いてこのような「占領感覚」と並行したのは、「内地へ逃げる」、「現在の生活を守る」、「解放を待つ」という3つの行動パターンである。言い換えれば、「占領感覚」は内地へ「逃げる」ことによって始まり、解放を「待つ」ことによって終わったのである。逃げる、守る、待つという3つのパターンは、占領下の上海民衆の「生きる」という行為をより細分化したものである。占領に直面した人々にとって、まず思いつくのは逃げることである。逃げられなければ残留し、現在の生活を守るしかない。一方、平穏な生活のリズムがあるように見えるが、それは本当の安らぎではなく、自己救済の手段である。米軍空襲への歓迎はまさにその平穏の虚構性を証明している。つまり平穏な生活リズムを「守る」ことは、占領の開始と向き合うために必要な心性の内面的構築であり、占領の終焉と向き合うためにひっくり返されなければならない前提でもあった。

以上のように本研究では、占領期の上海史、民衆史、「グレーゾーン」研究の交差点に立ち、「下から」の視点に立って顔濱日記に記された個人的経験に対して考察と分析を行い、その経験を占領地の「ポスト五四青年」までに拡大しようと試みた。本研究のオリジナリティーは、(1)グランド・ナラティブとは異なる個人の「占領感覚」における占領の開始、過程と終焉を描いた、(2)古

厩忠夫が論じた占領下の上海民衆の「生きる」ということを詳細化し、それを「逃げる」「守る」「待つ」という3つのパターンにまとめた、(3)それを知識青年にとっての「グレーゾーン」と位置づけようとした。